■今月の特選句

2021年10月

枯れる夢ばかり見ている水中花

青木輝子

花は枯れるものという常識が通用せぬのが水中花だ。枯れずに済むという特権があるのだが、ある時、枯れてこそ花と気が付いたらしい。

古書売つて今宵たつぷり新走

赤瀬川至安

新酒を飲みたくても金がない。ここで価値観の大転換が起きる。本をとるか酒をとるか。新酒は今しか味わえぬものだ。今ここに生きるのだ。

軍歌しか知らねえと立つ敬老会

久松久子

軍歌が大脳皮質にしみついている世代に、今の流行歌は歌えない。古い生き方と軍歌だけは自信があるとばかりに蛮声を張り上げる。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の特選句

2021年10月

犯行を誇示する鵙のテロリスト

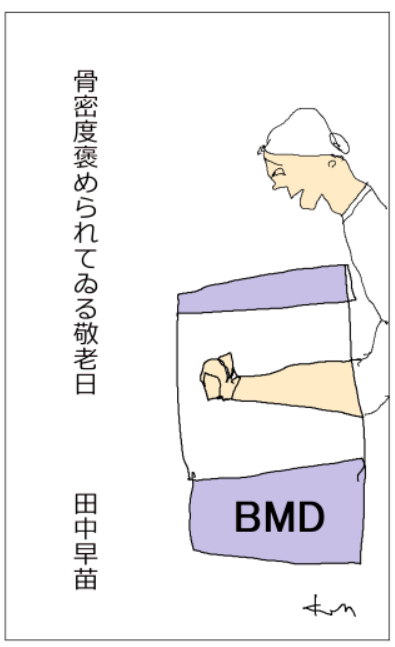
小林英昭

鵙の贄という証拠物件を諸所に残して悪びれもせず木のてっぺんで威張る鵙。しかし、鵙自身にはテロリストという自覚はさらさらないのである。

うしろから鰻の話ついて来る

山本　賜

後ろの人の話が耳に入ってきた。自身に関心のある事柄には耳が敏感に反応して情報をキャッチするのだ。しばらく後ろの話について行こう。



骨密度褒められてゐる敬老日

田中早苗

敬老日に骨密度測定があった。「田中さん、骨はお歳よりうんとお若いです。この数値なら四十代ですよ」「はい、気持ちはいつも二十歳です」。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の秀逸句　（・・・七七をつけてみました）

崩れさう匙が思案のかき氷　井野ひろみ
・・・思案する間にどんどん溶ける

蟬鳴いてこの世やたらと騒がしい　白井道義
・・・ええい補聴器外してしまえ

ピーマンを今宵主役に抜擢す　八塚一青
・・・だから獅子唐ひねくれるのよ

満月の裏に隠され金の蔵　森岡香代子
・・・裏の事情が表に滲み

新涼の小池にはまってさあ大変　土屋泰山
・・・だけど転んでただでは起きず

りりりりりるるるるる虫はラ行が好きらしく　日根野聖子
・・・虫を捕らえる手がかりここに

初秋刀魚触らないでの御触書　柳村光寛
・・・魚屋今じゃ水族館めく

生き上手とも秋の蚊のしぶとさは　吉川正紀子
・・・蚊にも学べる人の生き方

天の川に寄り道したい宇宙旅行　和田のり子
・・・ついでだからと天国覗き

秋の風夫婦間には早くから　南とんぼ
・・・だからふたりは涼しげに見え

栃の実鑑賞てのひらに転がして　遠藤真太郎
・・・なるほどこれは芸術作品

盆僧の読経むにゃむにゃマスクして　田村米生
・・・お経の意味はどうせわからん

枝豆に飽きて恋人探すビア　花岡直樹
・・・ビアの浮気をどこまで許す

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の滑稽句

＊今月の特選句･秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

この美田揚羽のすみかに残したる	相原共良
秋夕焼ときおり鳥の巣に帰る	相原共良
長き夜や甘露の慈雨の音を聴く	相原共良
芋虫のいまに見ていろ大変身	青木輝子
テレワーク昼寝している靴背広	青木輝子
奥方と健康診断馬肥ゆる	赤瀬川至安
いつまでもこうしちやをれぬ水中花	赤瀬川至安
清貧を心に白の曼珠沙華	井口夏子
草花に言葉をかけて秋さびし	井口夏子
人けなき納屋にごろんと大南瓜	井口夏子
もてあます休み疲れの夏休	池田亮二
夏の風邪みんなで騒げば怖くない	池田亮二
こはごはと前歯で齧る桃嫌ひ	石塚柚彩
ジョギングのしんがりはパパ処暑の朝	石塚柚彩
座頭市のごとき構へや西瓜わり	石塚柚彩
出逢えるか五輪砕きの出る相撲	伊藤浩睦
蚊に喰はれ逃げても食はれ又食はれ	伊藤浩睦
稔田の米の終点なる厠	伊藤浩睦
焼秋刀魚高値をつけて片隅に	稲沢進一
秋の雲知らないことはつゆ知らず	稲沢進一
朝顔やきのふの夢はけふの夢	稲沢進一
追伸に木犀の香を添へてあり	稲葉純子
子規庵にお邪魔しますと昼ちちろ	稲葉純子
山は饒舌や紅白の曼珠沙華	稲葉純子
メニューには和洋のレシピかき氷	井野ひろみ
ごきぶりが路地を横切り目が点に	井野ひろみ
夏の朝コンビニといふオアシスへ	上山美穂
蜉蝣の姿勢正しくとまりをり	上山美穂
空芯菜頬張り今日はベジタリアン	上山美穂
大壺に秋の草花投げ入れて	梅野光子
稲穂揺れ赤とんぼ群れ秋本番	梅野光子
秋の朝とぎれとぎれに鳩の鳴く	梅野光子
案山子にもシュールさ似合う付けまつ毛	遠藤真太郎
紫電一閃色なき風が天下取る	遠藤真太郎
「おまえの親ワクチンしたか」休暇明	大林和代
うろこ雲患者のまへを出勤す	大林和代
遠花火会えないけれど元気かしら	大林和代

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事･写真･イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写･転載等を禁じます。

処暑の風稜線を行く龍の雲	小笠原満喜恵
コロナ禍も沸いた五輪の汗と技	小笠原満喜恵
蟷螂を怒らせちやつたらイナバウアー	小笠原満喜恵
公園や小鳥のおしゃべり栗鼠が聞く	岡田廣江
本買えばお印テープといふ秋思	岡田廣江
石段の二段ほど先行く蜻蛉	岡田廣江
十割はわりあい苦いきびだんご	加藤潤子
ママどうぞ露草と服の青いシミ	加藤潤子
かまきりの一歩に大きく後ずさり	加藤潤子
手紙書く当たって砕けろ夜は長し	北熊紀生
サングラス外し眩しき君を見ぬ	北熊紀生
隣組梅干弁当やせ我慢	金城正則
神風の正体只の台風で	金城正則
ゼイタクは敵どんぐりを食め栗を噛め	金城正則
黙祷のリカちゃん人形終戦日	久我正明
福耳に真っ赤なピアスさくらんぼ	久我正明
点滅めくカンナの色はいい加減	久我正明
草の名に犬猫烏と姫鑑	工藤泰子
木槿咲く一日を絞り切れざるも	工藤泰子
サイレンもワウワウフワと熱中症	工藤泰子
玉砂利の音鈍ければ夏深し	桑田愛子
風の盆無口な男(ひと)と坂に立つ	桑田愛子
焼き芋の自販機前で思案中	桑田愛子
秋茄子や嫁姑の攻防戦	小林英昭
近ごろは不在のはやる墓参り	小林英昭
舌ぺろり孫と比ぶるかき氷	壽命秀次
蝉しぐれなかなか来ない過疎のバス	壽命秀次
水着の娘括れはどこへいったやら	壽命秀次
右向けばみんな右向く敗戦日	白井道義
百歳を目指しすこやか生身魂	白井道義
肉球も灼くる舗道や夕茜	鈴鹿洋子
行商のトロ箱担ぐ秋の駅	鈴鹿洋子
鳴く蛙鳴かない蛙に朝が来た	鈴木和枝
朝夕の田廻りだけじゃ懐かない蛙	鈴木和枝
高齢者と言われたくない肘タッチ	鈴木和枝
毒消やまずは検温おでこにて	髙田敏男
案内は雛僧（すうそう）まかせ秋彼岸	髙田敏男
風来坊改札出れば月の客	髙田敏男

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

取説のほしき亭主や秋暑し	高橋きのこ
高齢化率伸びるが目立ち敬老日	高橋きのこ
鳥渡る鳥めく碍子下に見て	高橋きのこ
荒れ果てし城址に殿様蜐蚸かな	竹下和宏
秋晴は走らにやハーレイダビッド損	竹下和宏
枝豆をつまみに飲み会できぬ時世	竹下和宏
老ゆるとは何ぞと問ふやかなかなは	田中　勇
芸術の力を信じ今朝の秋	田中　勇
かまきりやピンチに負けぬ意志をもつ	田中　勇
生きること楽しむ卒寿の生身魂	田中早苗
どくだみもアロエも無料常用す	田中早苗
晩酌のお伴は空のいわし雲	谷本　宴
新涼や猫も足取り軽くなり	谷本　宴
猫じゃらし犬がじゃれても猫じゃらし	谷本　宴
うつうつと過ごすコロナ禍腹はへる	田村米生
長雨におばけのやうな案山子かな	田村米生
諍ひはとろろもろとも腹に落ち	月城花風
田の中に籠る日続く案山子かな	月城花風
稲妻に歪むカーテンレールかな	月城花風
スーパーに黄色の西瓜なして無い	土屋泰山
メタボでもみんなよだれの秋鰹	土屋泰山
お裾分けできぬ苦さのゴーヤかな	飛田正勝
三密も露草なれば許されて	飛田正勝
飲み薬手にずつしりと敬老日	飛田正勝
亡き友と寄りどり選ぶ生姜市	長井知則
燃え尽きて色あせし白曼殊沙華	長井知則
花野背に微笑む亡母の写真かな	長井知則
残る蚊に不意をつかるる砦跡	名本敦子
嫌はれてゐるとも知らず穴惑	名本敦子
きままなる二人の昼や走り蕎麦	名本敦子
二学期のステイホームで始まれり	西をさむ
秋来ぬと目にはさやかに永田町	西をさむ
三日月に乗せて赤子を眠らせる	西をさむ
辛子茄子酒屋の婆の得意技	花岡直樹
異常気象に歩調の合わぬ曼珠沙華	花岡直樹
ごはんよりアイスと君はいやいや期	浜田イツミ
涼しかりけりボッチャは的にぴつたりと	浜田イツミ
パラオリの足もてぬぐふ玉の汗	浜田イツミ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

空に坂あるらむ帰燕尾根を越え	東　麗子
流星の真下赤子の鼓動かな	東　麗子
朝刊のきのふを今に色鳥来	東　麗子
食の秋ペットの犬も肥満体	久松久子
皺伸ばしの口の運動夜の長し	久松久子
のぼさんも画帳に描きし女郎花	日根野聖子
お抹茶をずずと飲み干し九月尽	日根野聖子
枯野のごとくコロナ禍の商店街	廣田弘子
自らは余命を知らず蝉時雨	廣田弘子
人間の愚かさ語る原爆忌	廣田弘子
秋惜む住めば琵琶湖といふあたり	藤森荘吉
宅配のピザ鎌倉の夜長かな	藤森荘吉
セミロング少し長生き秋の蝉	藤森荘吉
雷も怖がるコロナの感染増	細川岩男
夏野菜何が旬やら旨いやら	細川岩男
前線が去って西日の強さかな	細川岩男
鼻毛めく排水口より秋の草	南とんぼ
気のせいかコロナコロナと虫の声	南とんぼ
爽やかや貧乏神と道連れは	峰崎成規
江戸弁は此岸しかなし秋彼岸	峰崎成規
翅畳み眠りたからう鬼やんま	峰崎成規
吾のずぼんヌの字に乾く今朝の秋	椋本望生
虎ロープ張つて追ひ出すいわし雲	椋本望生
柿をもぐ一竿ごとに息止めて	椋本望生
豊作や眩しき西陽に軍手脱ぐ	向田将央
告白にほぐす秋刀魚の箸をおく	向田将央
新調の神輿眺める秋の朝	向田将央
鬼灯を鳴らして妻の上機嫌	村松道夫
ピカドンと竹槍戦ふ終戦忌	村松道夫
いちじくの今が旬なり一時食ふ	村松道夫
兜太逝き朗人も逝きぬ鰯雲	百千草
我が齢たとへば葡萄の重さほど	百千草
町猫がひよいと貌出し秋暑し	百千草
人影を真似して揺るる白芙蓉	森岡香代子
どんな味コオロギ入りのクッキーは	森岡香代子
褒め方が難しくつて零余子飯	八木　健
夜寒とて薄手いちまいあれば足る	八木　健
いちばん赤いクレヨンはどれ曼殊沙華	八木　健

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

初秋を見つけた途端お腹鳴る	八塚一青
ミュートした字幕映画に虫の声	八塚一青
三度目は破れかぶれに金魚追ふ	柳　紅生
飲み物の幅を利かせて冷蔵庫	柳　紅生
腹八分二分は薬の温め酒	柳　紅生
人避けかも唐黍畑に電気柵	柳村光寛
天然と赤き太文字紅葉鯛	柳村光寛
ケーキ屋のショーケースにまで竜田姫	山内　更
無花果を買に行くため眉を描く	山内　更
食べ物の句ばかり浮かぶ九月かな	山内　更
薄着して布団恋しき朝となり	山下正純
うなづくやカナカナカナと泣く蟬に	山下正純
支え合つて実りを守る垂穂かな	山下正純
織姫へ彦星からの牽牛花	山田真佐子
お返しのカタログめくり夏果てる	山田真佐子
盆生まれ先祖の生まれ替わりとも	山田真佐子
まだ他の何かで色をかき氷	山本　賜
窓ガラスシールのような天道虫	山本　賜
新涼やホイップの角（つの）たちあがる	山家志津代
破れ蓮顎（あぎと）で笑ふ髑（されこうべ）	山家志津代
星月夜ブルーモスクの鎮まれり	山家志津代
フジバカマわたしゃ七草ブランド草	横山洋子
天候の急変知らす風鈴かな	横山洋子
老いたれば洒落た服着て秋祭	横山洋子
食通の顔して秋刀魚の腸を食ふ	吉川正紀子
踝（くるぶし）に絡まつてくる秋風	吉川正紀子
威し銃横目に集ふ鳥の群	吉原瑞雲
予後なれば噛んで飲んでる般若湯	吉原瑞雲
蔓たぐり引き寄せ見れば土手南瓜	吉原瑞雲
昨日味噌今日はケチャップ秋茄子	渡部美香
指先に甘藷の灰汁のつきまとひ	渡部美香
新涼やカットクロスを髪滑る	渡部美香
ささやかなエコの暮らしよ糸瓜咲く	和田のり子
三十億掛かる旅路よ天の川	和田のり子

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。